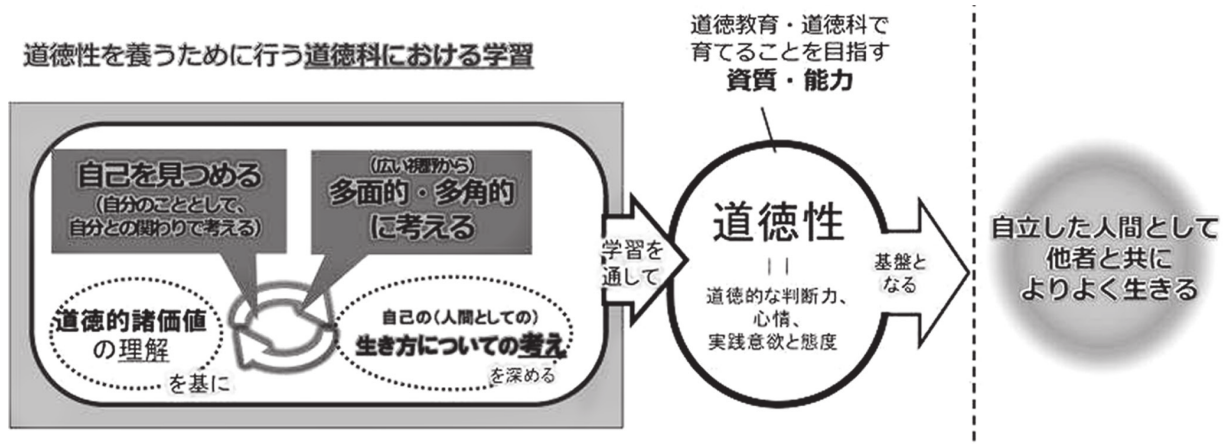


小学校 特別の教科 道徳

1 教育課程実施上のポイント

(1) 目標

第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。



道徳科は、道徳科以外における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補ったり、深めたり、相互の関連を考えて発展させ、統合させたりすることで、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳性を養うことが目標に挙げられています。



(2) 実施上のポイント

①改訂のポイント

◇基本方針について

道徳の時間を教育課程上「特別の教科 道徳」として新たに位置付け、その目標、内容、教材や評価、指導体制の在り方等が見直した。

◇目標について

よりよく生きていくための資質・能力を培うという趣旨を明確化するため、従前の「道徳的実践力を育成する」ことを、具体的に、「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」と改めた。

◇内容について

小学校から中学校までの内容の体系性を高めるとともに、構成やねらいを分かりやすく示して指導の効果を上げるなどの観点から、それぞれの内容項目に手掛かりとなる「善悪の判断、自律、自由と責任」などの言葉を付記した。

②道徳科における「見方・考え方」

道徳科における「深い学び」の鍵となる「見方・考え方」は、目標に示されている、「様々な事象を、道徳的諸価値の理解を基に自己との関わりで多面的・多角的に捉え、自己の生き方について考えること」である。

③主体的・対話的で深い学びを実現させるための授業改善のポイント

<p>「主体的な学び」 の視点</p>	<p>◆児童が問題意識をもち、自己を見つめ、道徳的価値を自分自身との関わりで捉え、自己の生き方について考えられるようにする。</p> <p>◆各教科で学んだこと、体験したことから道徳的価値に関して考えたことや感じたことを統合させ、自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすることができるようにする。</p>
<p>「対話的な学び」 の視点</p>	<p>◆子ども同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えたり、自分と異なる意見と向かい合い議論すること等を通じ、自分自身の道徳的価値の理解を深めたり広げたりできるようにする。</p>
<p>「深い学び」 の視点</p>	<p>◆道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方について考える学習を通して、様々な場面、状況において、道徳的価値を実現するための問題状況を把握し、適切な行為を主体的に選択し、実践できるような資質・能力を育てる学習となるようにする。</p>

◇児童が主体的に道徳性を養うための指導

児童が自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすることができるよう工夫すること。その際、道徳性を養うことの意義について、児童自らが考え、理解し、主体的に学習に取り組むことができるようにすること。

◇多様な考え方を生かすための言語活動

児童が多様な感じ方や考え方に接する中で、考えを深め、判断し、表現する力などを育むことができるよう、自分の考えを基に話し合ったり書いたりするなどの言語活動を充実すること。

◇問題解決的な学習など多様な方法を取り入れた指導

児童の発達の段階や特性等を考慮し、指導のねらいに即して、問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習等を適切に取り入れるなど、指導方法を工夫すること。その際、それらの活動を通じて学んだ内容の意義などについて考えることができるようにすること。また、特別活動等における多様な実践活動や体験活動も道徳科の授業に生かすようにすること。

(3)「特別の教科 道徳」の評価

児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。

①道徳科における評価の基本的な考え方

- ◆児童にとっては、自らの成長を実感し、意欲の向上につなげていくものであり、教師にとっては、教師が目標や計画、指導方法の改善・充実に取り組むための資料である。
- ◆道徳科の特質を踏まえれば、評価に当たっては、以下のことが求められる。
 - ・数値による評価ではなく、記述式とすること
 - ・個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価とすること（※1）

- ・他の児童との比較による評価ではなく、児童がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価（※2）として行うこと
- ・学習活動において児童がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視すること
- ・道徳科の学習活動における児童の具体的な取組状況を一定のまとまりの中で見取ること
- ・発達障がい等のある児童が抱える学習上の困難さの状況等を踏まえた指導及び評価上の配慮を行うこと

※1 「大きくくりなまとまりを踏まえた評価とすること」とは…

年間や学期といった一定の時間的なまとまりの中で、児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を把握する必要があるということ

※2 「個人内評価」とは…

児童のよい点を褒めたり、さらなる改善が望まれる点を指摘したりするなど、児童の発達の段階に応じ励ましていく評価

②道徳科の評価（指導要録への記述）

一人一人の児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子について、発言や会話、作文・感想文やノートなどを通じて、以下のような点に注目して見取り、特に顕著と認められる具体的な状況を記述する。

他者の考え方や議論に触れ、自律的に思考する中で、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか	多面的・多角的な思考の中で、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか
---	---

<評価の視点例>

一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているかどうか

- 道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしている
- 自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしている
- 複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしている

道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかどうか

- 読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしている
- 現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直している
- 道徳的な問題に対して自己の取り得る行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解を更に深めている
- 道徳的価値の実現することの難しさを自分のこととして捉え、考えようとしている



評価に当たっては、児童が一年間書きためた感想文をファイルしたり、1回1回の授業の中で全ての児童について評価を意識した変容を見取るのは難しいため年間35時間の授業という長い期間で見取ったりするなどの工夫も必要です。

道徳科の評価を推進するに当たっては、学習評価の妥当性、信頼性等を担保することが重要です。そのためには、評価は個々の教師が個人として行うのではなく、学校として組織的・計画的に行われることが重要です。



2 考え、議論する道徳の実現に向けて

児童が自分の考えを持ち、他者と関わりながら考え、議論する授業とするためには、多様な指導方法を授業の中に効果的に取り入れることが求められる。以下の3つの指導方法は、平成28年7月22日に道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議の報告で例示されたものである。

読み物教材の登場人物への 自我関与が中心の学習	問題解決的な学習	道徳的行為に関する 体験的な学習
----------------------------	----------	---------------------



これらの方法はそれぞれ独立しているわけでもなく、3つに限られるものでもなく、また相互が組み合わさった指導も、考え、議論する道徳の授業づくりの手掛かりとして有効なものと考えられます。

「同じ仲間だから」を教材とした指導例（出典：『わたしたちの道徳』）

< C 公正、公平、社会正義 >

(1) ねらいの明確化

運動会で勝ちたい気持ちに共感したり、正しいと思うことを勇気をもって友達に伝えた主人公の行為の内面にある思いを考えたりすることを通して、友達の身になって考え、分け隔てをせずに行動することの大切さに気付き、誰に対しても公正、公平に接しようとする態度を育てる。

授業の中で児童とともに考えを深めたいこと（下線部分）について記すことで、目指す授業が明確になります。そのためにも、児童の実態に基づいて何を身につけさせたいのかという明確な意図をもって指導することが大切です。



(2) 問いの工夫

◎とも子さんが、よし子さんからの手紙の内容を思い出し、はっとしたのはなぜでしょう。

- ・よし子さんもつらい思いをしていたから。
- ・光男君は、どう思っているか気になってきたから。
- ・自分がしていることは、仲間外しになるかもしれないと気付いたから。

児童の発言を生かしながら、ねらいとする道徳的価値に近づくように問い返すことも大切です。



左の児童の反応に対する問い返し例

- よし子さんのことと重なったのは、なぜだろう。
- 光男君のことが気になったのは、なぜだろう？
- 自分のどんな行動が頭に浮かびましたか？

(3) 評価への取組

★本時においては、以下のような学習状況を見取ることが「評価」の手がかりとなる。

- ・とも子の発言について考えることを通して、ひろしの気持ちに共感しながらも、仲間外しが正しい行為ではないことに気付き、他者の身になって考えようとする記述や発言がみられる。
- ・とも子の気付きと言動、ひろしの思いを考えることを通して、友達を大切にするために、相手の言動の誤りを正していこうとする記述や発言がみられる。
- ・友達には、それぞれ違ったところがあり、互いに相手のことを思い合わなければ良好な関係がつかれないことを理解し、分け隔てなく関わっていこうという記述や発言がみられる。
- ・自分の生活を振り返り、友達の意見を参考にした新しい気付きや考えの記述や発言が見られる。



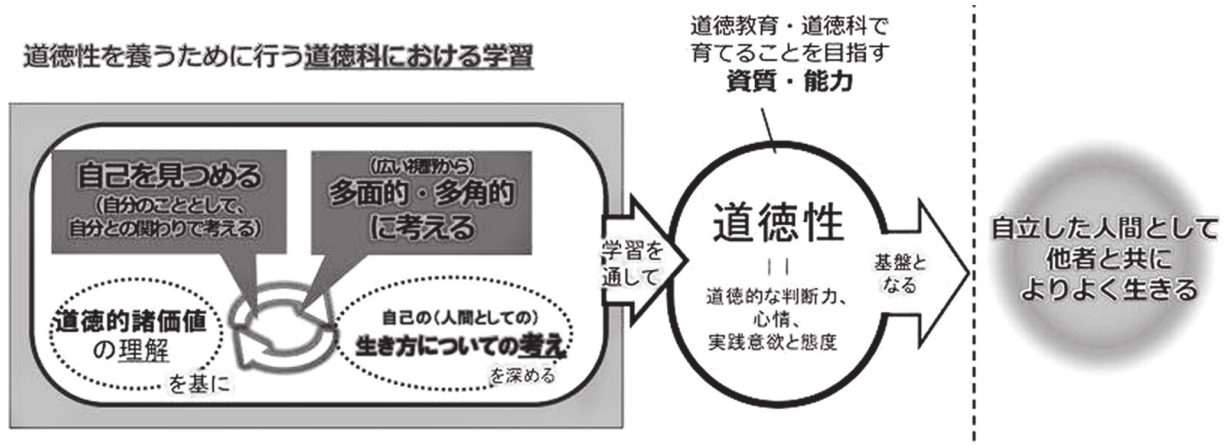
児童一人一人のどのような学習状況を見取ることが可能であるかを授業の前に整理しておくことが大切です。

中学校 特別の教科 道徳

1 教育課程実施上のポイント

(1) 目標

第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。



道徳教育の要となる道徳科の目標は、道徳性を養うために重視すべきより具体的な資質・能力とは何かを明確にし、生徒の発達段階を踏まえて計画的な指導を充実する観点から規定されたものです。その際、道徳的価値や人間としての生き方についての自覚を深め、道徳的実践につなげていくことができるようにすることが求められます。



(2) 実施上のポイント

①改訂のポイント

◇基本方針について

道徳の時間を教育課程上「特別の教科 道徳」として新たに位置付け、その目標、内容、教材や評価、指導体制の在り方等を見直した。

◇目標について

よりよく生きていくための資質・能力を培うという趣旨を明確化するため、従前の「道徳的実践力を育成する」ことを、具体的に、「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」と改めた。

◇内容について

小学校から中学校までの内容の体系性を高めるとともに、構成やねらいを分かりやすく示して指導の効果を上げることや、内容項目が多くの人に理解され、家庭や地域の人とも共有しやすいものとするなどの観点から、それぞれの内容項目に手掛かりとなる「自主、自律、自由と責任」などの言葉を付記した。

②道徳科における「見方・考え方」

道徳科における「深い学び」の鍵となる「見方・考え方」は、目標に示されている、「様々な事象を、道徳的諸価値の理解を基に自己との関わりで広い視野から多面的・多角的に捉え、人間としての生き方について考えること」である。

③主体的・対話的で深い学びを実現させるための授業改善のポイント

<p>「主体的な学び」 の視点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◆生徒が問題意識をもち、自己を見つめ、道徳的価値を自分自身との関わりで捉え、自己の生き方について考えられるようにする。 ◆各教科で学んだこと、体験したことから道徳的価値に関して考えたことや感じたことを統合させ、自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすることができるようにする。
<p>「対話的な学び」 の視点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◆子ども同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えたり、自分と異なる意見と向かい合い議論すること等を通じ、自分自身の道徳的価値の理解を深めたり広げたりできるようにする。
<p>「深い学び」 の視点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◆道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、人間としての生き方について考える学習を通して、様々な場面、状況において、道徳的価値を実現するための問題状況を把握し、適切な行為を主体的に選択し、実践できるような資質・能力を育てる学習となるようにする。

◇生徒が主体的に道徳性を育むための指導

生徒が自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすることができるよう工夫すること。その際、道徳性を養うことの意義について、生徒自らが考え、理解し、主体的に学習に取り組むことができるようにすること。また、発達段階を考慮し、人間としての弱さを認めながら、それを乗り越えてよりよく生きようとすることのよさについて、教師が生徒と共に考える姿勢を大切にすること。

◇多様な考え方を生かすための言語活動

生徒が多様な感じ方や考え方に接する中で、考えを深め、判断し、表現する力などを育むことができるよう、自分の考えを基に討論したり書いたりするなどの言語活動を充実すること。その際、様々な価値観について多面的・多角的な視点から振り返って考える機会を設けるとともに、生徒が多様な見方や考え方に接しながら、更に新しい見方や考え方を生み出していくことができるよう留意すること。

◇問題解決的な学習など多様な方法を取り入れた指導

生徒の発達の段階や特性等を考慮し、指導のねらいに即して、問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習等を適切に取り入れるなど、指導方法を工夫すること。その際、それらの活動を通じて学んだ内容の意義などについて考えることができるようにすること。また、特別活動等における多様な実践活動や体験活動も道徳科の授業に生かすようにすること。

(3)「特別の教科 道徳」の評価

生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。

①道徳科における評価の基本的な考え方

◆生徒にとっては、自らの成長を実感し、意欲の向上につなげていくものであり、教師にとっては、教師が目標や計画、指導方法の改善・充実に取り組むための資料である。

◆道徳科の特質を踏まえれば、評価に当たっては、以下のことが求められる。

- ・数値による評価ではなく、記述式とすること
- ・個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価とすること(※1)
- ・他の生徒との比較による評価ではなく、生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価(※2)として行うこと
- ・学習活動において生徒がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視すること
- ・道徳科の学習活動における生徒の具体的な取組状況を一定のまとまりの中で見取ること

※1「大きくくりなまとまりを踏まえた評価とすること」とは…

年間や学期といった一定の時間的なまとまりの中で、生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を把握する必要があるということ

※2「個人内評価」とは…

生徒のよい点を褒めたり、さらなる改善が望まれる点を指摘したりするなど、生徒の発達段階に応じ励ましていく評価

②道徳科の評価（指導要録への記述）

一人一人の生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子について、発言や会話、作文・感想文やノートなどを通じて、以下のような点に注目して見取り、特に顕著と認められる具体的な状況を記述する。

注目する点	例えば
他者の考え方や議論に触れ、自律的に思考する中で、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか	<ul style="list-style-type: none"> ▶自分と違う意見を理解しようとしている ▶複数の道徳的価値の対立する場면을多面的・多角的に考えようとしている
多面的・多角的な思考の中で、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか	<ul style="list-style-type: none"> ▶読み物教材の登場人物を自分に置き換えて具体的に理解しようとしている ▶道徳的価値を実現することの難しさを自分事として捉え考えようとしている



評価に当たっては、生徒が一年間書きためた感想文をファイルしたり、1回1回の授業の中で全ての生徒について評価を意識して変容を見取るのは難しいため年間35時間の授業という長い期間で見取ったりするなどの工夫が必要です。

道徳科の評価は、道徳科の授業で自分のこととして考えている、他人の考えなどをしっかり受け止めているといった成長の様子を丁寧に見て行う、記述による「励まし、伸ばす」積極的評価を行います。



2 考え・議論する道徳の実現に向けて

「二通の手紙」を教材とした指導例（出典：『私たちの道徳』）

< C 遵法精神、公德心 >

（1）ねらいの明確化

<ねらいの例>

元さんの判断やそのことで生じた様々な出来事について考えることを通して、法やきまりは自分自身や他者の生活や権利を守るためにあることや、自分たちを守るだけでなく自分たちの社会を安定的なものにしていることに気づき、法やきまりを進んで守るとともに、そのよりよい在り方について考え、自他の権利を大切にし、義務を果たして、規律ある安定した社会を実現しようとする態度を育てる。

授業の中で子どもたちと共に考えを深めたいことについて記す（下線部）ことで、目指す授業の姿がより明確になります。



（2）発問の工夫

<例①>

規則に反して姉妹を入園させた元さんの判断に賛成ですか、反対ですか。理由も述べましょう。

元さんの判断に対する賛否とその理由を問うことで、ねらいとする道徳的価値について、関連する道徳的価値も踏まえて考えることになり、より深い学びへとつながることが期待できます。



<例②>

入園終了時間を過ぎた後に姉妹から「入園したい」という申出があったとき、元さんはどのように対応すればよかったのでしょうか。理由も述べましょう。

AかBかの二者択一ではない問いにより、よりよい解決策を様々な視点から考えさせることで、ねらいとする道徳的価値について、多面的・多角的に考えさせることや道徳的に判断することの良さや難しさを実感させることになり、より深い学びへとつながることが期待できます。



<例③>

二つ目の手紙を受け取った後、元さんが辞職の判断をしたことについて、どう思いますか。

元さんの「辞職という判断」について問うことで、ねらいとする道徳的価値を踏まえた様々な考えを、自分の言葉で表現させることになり、より深い学びへとつながることが期待できます。



これらの問いを通じて、自分の考えを持たせた上で、他者の考えと交流させることで、生徒の見方・考え方を育てていくことができます。そして、この授業で培った見方・考え方を次の道徳の授業や日常生活の中で働かせていくことになります。